

使役動詞 *make* の史的発達に関する一考察

Caxton の *Reynard the Fox* を中心に *

家 入 葉 子

現代英語の使役動詞 *make* は、能動態で原形不定詞、受動態で *to* 不定詞を従える。この変則的ともいえる「ルール」は、英語の史的発達の中で確立してきたものであり、時代を遡ると、能動態でも *to* 不定詞が使用されたり、受動態でも原形不定詞が使用されたりする。たとえば、*The Bible in English on CD-ROM*¹ を使って *make* を検索すると、19世紀でも、(1) のように能動態で *to* 不定詞を従える例を観察することができる。

- (1) ... and God *made* a wind *to pass* over the earth, and the waters were checked.
(Noah Webster, *The Holy Bible* (1833), Genesis 8:1)²

また、今日でも諺として使用される *Money makes the mare to go* は、この名残である。小論では、能動態における原形不定詞の使用が徐々に拡がりを見せる中英語後期の文献から、Caxton の *Reynard the Fox* (以下、*Reynard*) の *make* の用法を調査し、その分析を通して、

* 本研究は、科学研究費基盤研究 (c) (課題番号 17520338) の助成を受けたものである。

¹ *The Bible in English on CD-ROM* (© 1996 by Chadwyck-Healey Ltd.).

² 例文中の斜字体は、全て筆者による。

使役動詞 *make* の史的発達のプロセスを考察する。調査には、Blake (1970) を使用した。³ なお、*Reynard* の該当例は、すべて能動態の例であった。

まず具体例を見ると、(2)(3) が示すように、*Reynard* では原形不定詞と *to* 不定詞の両方が起こる。

(2) ... for I *made her leepe* in a grenne wher she was al to beten (25/26-27)

(3) ... in whiche I *made ysegrym to crepe* (26/13)

さらに (4) のように、*that* 節が続く場合もある。

(4) I wolde yet this nyght *make that* ye shuld be ful of myes (21/14)

このように様々な構文と共に生じた *make* が原形不定詞の使用を確立していく過程は、おそらく文法化の過程の一環であるといえよう。すなわち、*make* が徐々に助動詞的な役割を強めていく過程である。これに対して、*that* 節を従える (4) のような用法では、*make* が助動詞に似た役割を果たしているとは考えにくい。(4) は、文法化の視点からは、現代英語の使役動詞 *make* から最も遠い位置にあるといつてよい。

そこで、*Reynard* における 3 種の構文の頻度を見ると、*make* + *that* 節が 5 例、*make* + *to* 不定詞が 18 例、*make* + 原形不定詞が 8 例となっている。文法化はまだあまり進んでいるとはいえないものの、*that* 節の頻度はかなり低く、少しずつ原形不定詞の構文が増加傾向を示している。残念ながら、使役動詞に関する先行研究の多くは、*to* 不定詞と原形不定詞の対立のみを扱っているため、先行研究との比較では、この 2 つの構文のみを利用せざるをえない。以下に、先行研究のデータと *Reynard* のものを並べて示した。

³ また、*Reynard the Fox* のテキストについては、関西外国語大学短期大学部元教授西村公正氏作成の電子版も使用させていただいた。

中英語および初期近代英語における使役動詞 make の用法

		(for) to 不定詞	原形 不定詞
(a)	<i>Ancrene Riwle</i> (Nero)*	14	18
	<i>St Juliana</i> *	9	3
(b)	Chaucer: <i>Troilus and Criseyde</i>	14	15
(c)	<i>Le Morte Darthur</i> *	19	12
	<i>Gesta Romanorum</i> *	22	3
	Capgrave: <i>St Katherine of Alexandria</i> *	7	4
	Lydgate: <i>Siege of Thebes</i> *	6	8
(d)	<i>Mandeville's Travels</i>	37	16
	<i>Mirk's Festial</i>	107	39
	<i>Paston Letters</i>	9	2
	Capgrave: <i>St Augustine and St Gilbert of Sempringham</i>	25	2
	<i>The Tretyse of Loue</i>	12	5
(e)	<i>Reynard the Fox</i>	18	8
(f)	Shakespeare	12	over 240
	Dryden	4	310

表の (a) は真鍋 (1995: 196)、(b) は Sawada (1997: 11)、(c) は真鍋 (1996: 111)、(d) は杉山 (1988: 46)、(f) は Fanego (1994: 196-97) から、2 つの構文の合計が 10 例以上のものを再録したものである。なお、表中の*は、テキストの抜粋を調査したものであることを示す。表より、原形不定詞が定着してくるのは、やはり近代英語期以降であり、中英語ではまだ to 不定詞 (あるいは for to 不定詞)⁴ が一般的であることがわかる。中英語文献で原形不定詞が優勢であるのは *Ancrene Riwle* と *Troilus and Criseyde* のみであり、このうちの *Ancrene Riwle* (中英語初期) については、原形不定詞の多用はむしろ古英語から引き継いだ古い傾向を示していると解釈することができる。古英語では make がしばしば原形不定詞を従えることが知られているからである (Fischer 1992: 318)。小論の関心は、中英語

⁴ *Reynard* には for to 不定詞の例はない。

で一旦 to 不定詞が拡がったあと、文法化により再び原形不定詞の使用に傾いていく現象にあるので、以下では後期中英語以降に焦点を絞ることにする。

表から、*Reynard* における make の用法は、後期中英語の一般的な状況を反映しているといえる。他のテキスト（後期中英語の文献は、表の(b)(c)(d)(e)）同様、文法化はあまり進んでおらず、この点は、最初に述べた make + that 節の構文が見られることとも合致する。しかし、変化の兆しがないわけではない。上の表には含まれていないが、杉山 (1988: 46) は *Caxton's Own Prose* における調査結果も示している。それによると、使役の make が 2 例あり、いずれも原形不定詞を従えているということである。すなわち、Caxton の他のテキストでは原形不定詞が優勢であるものもある。また、*Reynard* においても、少なくとも 26 例中 8 例 (30.7%) が、すでに原形不定詞を伴っている。

次に、to 不定詞と原形不定詞の選択に何らかの要因が働いている可能性について探してみたい。この点については、Rohdenburg (1996: 157-59) が、to 不定詞の使用がすでに少数派となった初期近代英語について、興味深い指摘をしている。動詞 make が to 不定詞を従えている場合には、目的語が代名詞ではなく名詞である場合が多く、特にその名詞が長い傾向があるというのである。この傾向は、to 不定詞の方がむしろ優勢である *Reynard* においても観察することができる。

たとえば、(5)(6)のように、目的語が人称代名詞のみの場合には、to 不定詞が 11 例、原形不定詞が 5 例となり、to 不定詞の割合は、68.8%である。

(5) for as moche as I made *hym* to fylle his bely (27/4)

(6) for I made *her* leepe in a grenne wher she was al to beten (25/26-27)

一方、(7)(8)のように、目的語の位置に名詞が入ると、to 不定詞

の割合はさらに高くなる。⁵

- (7) they make *al myn heer* to stande right vp (94/25)
 (8) that he had made *the man* quyte and free (73/18-19)

この場合、to 不定詞は 7 例、原形不定詞は 2 例で、to 不定詞の割合は、77.8%となる。⁶

また、以下の例のように、make と不定詞の間に挟まれる要素が長い場合には、一般に to 不定詞が選択されている。

- (9) These wordes plesyd the bere so wel and *made* hym so moche *to lawhe*
 (14/36-37)
 (10) and *made* the wulf and the bere anon *to be* arestyd (43/6)
 (11) And also I *made* the wulf and his wyf *to lese* her shoon (58/14-15)

(9)では、make と不定詞の間に、目的語に加えて so moche が介在している。(10)でも同様に anon が介在しており、また目的語も単体ではなく、A+Bの構造をしている。同様に、(11)の目的語も A+Bの構造になっている。

以上のような傾向を、Rohdenburg は、初期近代英語なら初期近代英語、というように基本的に同時代的な問題として捉えている。すなわち、選択肢が複数存在する場合には、複雑な言語環境ほど、より明確な形式(この場合は to 不定詞)を選択するのだと説明している。もっとも、*Reynard* のように to 不定詞がごく一般的であるようなテキストにおいても、時代を横断して同じ傾向が見られることを考えると、この点は、言語の史的な発達の問題でもある。すなわち何らかの形で選択肢が存在した瞬間から、個々の選択肢は一定の言語環境との関連性を強めていくようになり、この関連性が言語変

⁵ 目的語の位置に人称代名詞と名詞の両方が入る例は、こちらに含めた。

⁶ make が目的語を取らない例 (I made bynde his feet to the belle rope, 26/2-3) は、ここでは扱わない。したがって、代名詞と名詞の場合の合計が表より 1 例少なくなっている。

化の流れを決定していくのだということが出来る。使役の *make* の場合には、目的語が軽微である代名詞のところから原形不定詞化が始まり、これに名詞が次々に合流していく。すなわち *Reynard* のような、あまり変化が生じていないと思われるテキストにおいても、言語変化の可能性は少しずつ拡大しているのだということが出来る。そして、複雑な言語環境で選択される傾向がある *to* 不定詞は、初期近代英語では、明らかに歴史的変化から取り残された形となっていく。この史的発達の流れを、すでに中英語において予見することができるといえよう。言語環境と選択肢との関連性は、原形不定詞の使用が十分に確立すると、今度は消滅に向かう。Money makes the mare to go において *to* 不定詞が残っているのは、言語環境の問題ではなく、むしろ慣用度の問題である。

最後に、翻訳の問題に触れておきたい。知られているように、*Reynard* はオランダ語から Caxton 自身が中英語に翻訳をしたものである。オランダ語版が複数存在することから、原典と Caxton 版との対応関係を厳密に明らかにすることは、現段階では必ずしも容易ではない。しかしながら、オランダ語テキストのうち、Caxton 版によく対応する Hellinga (1952) の該当箇所を検討したところ、Caxton 版で *to* 不定詞が使用されている箇所は、オランダ語版ではおおむね原形不定詞であることがわかった。⁷ したがって、*Reynard* における *make + to* 不定詞の使用は Caxton の言語を反映していると考えてよさそうである。

以上、*Reynard* における使役動詞 *make* の用法を、史的発達の観点から分析してきた。初期近代英語期までには、*make +* 原形不定詞はかなりの定着を見せるが、*Reynard* では、まだ *to* 不定詞が優勢であり、*make* の文法化は他の中英語のテキストと同様、あまり進んでいない。このことは、*make* が *that* 節を従える例が一部に残っていることから明らかである。また、*to* 不定詞と原形不定詞の使

⁷ ただし、約半数は構文自体が異なっていて、不定詞に対応していない。

い分けについては、make と不定詞の間に介在する要素の性質が関係しているようである。この点は、単に同時代的な問題としてだけでなく、使役動詞の史的発達という観点からも興味深いところである。Caxton の英語全般について議論をするにはさらなる調査が必要であるが、*Reynard* の状況は、必ずしも翻訳の影響によるとは考えられないという意味で、後期中英語の実態を推測する際の手がかりの一つとしてよいといえよう。

参考文献

- Blake, Norman F. (ed.) 1970. *The History of Reynard the Fox: Translated from the Dutch Original by William Caxton*. EETS 263. London: Oxford University Press.
- Fanego, Teresa. 1994. "Infinitive Marking in Early Modern English," in *English Historical Linguistics 1992: Papers from the 7th International Conference on English Historical Linguistics, Valencia, 22-26 September 1992*, ed. Francisco Fernández, et al., pp. 191-203. Amsterdam: John Benjamins.
- Fischer, Olga. 1992. "Syntax," in *The Cambridge History of the English Language, Vol. II: 1066-1476*, ed. Norman Blake, pp. 207-408. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hellinga, W. G. (ed.) 1952. *Van den Vos Reynaerde: I Teksten*. Zwolle: W. E. Tjeenk Willink.
- Rohdenburg, Günter. 1996. "Cognitive Complexity and Increased Grammatical Explicitness in English". *Cognitive Linguistics* 7: 149-82.
- Sawada, Mayumi. 1997. "Causative Verbs in Chaucer". *ERA* 15: 1-16.
- 杉山隆一. 1988. 「15 世紀散文の使役構文における不定詞標識について」
Studies in Medieval English Language and Literature 3: 43-55.
- 真鍋和瑞. 1995. 「初期中英語における使役構文の不定詞標識及び使役動詞 do と make の競合関係」『活水論文集』38: 191-212.
- 真鍋和瑞. 1996. 「15 世紀英語の使役構文における不定詞標識と使役動詞の競合関係」『活水論文集』39: 109-20.